

## 私の学問放浪記

渡 植 彦 太 郎

### 一

どう考えても、私の生れ且つ育った家庭環境は、后年学問を業とする人間にふさわしかったとは思えない。私の生家は東京日本橋の紙問屋であった。しかし、老舗というのではなく、芝の名主の次男であった父が、当時東京の一流の紙問屋に見習奉公をして若くして自立し、その主家と同じ組合のメンバーになっていたのであるから、仲々の腕利の商人であったに相違ない。この父を私は四才の時失ったが、三十七回忌であったかと思うがその席上、同じ紙問屋仲間の生残りの老人が、私に向って貴方の父上は紙屋の神様といわれた人だったといって、私の不肖さを慨嘆したことを覚えている。こんな訳で、私は当然父の興した紙問屋の業を継ぐことに決められて居り、幼名の秀太郎を改めて父の名を襲って彦太郎とした位であった。したがって、幼い頃は自分では何も分らぬなりに、紙問屋の主人になるつもりでいた。当時東京の下町では、不自由のない家の子でも中学へ進むとは極めていなかった。

が、私は小学校の成績がよい方であったので、先生にすすめられ、府立一中の入試を受けて幸運にも入学出来た。余程得意であつたらしく、新しいきしよをつけた制帽を冠って、用もないのに近所を歩き廻ったことを覚えている。府立一中は、当時東京中の小学校の秀才の集るところであつたから、私は勿論たいしてよい成績で入った筈はな

いの、何の間違いか第一学期に級長にされた。元々実力のない上に、余り勉強もしなかったので第一学期末の成績も半分より一寸上位であったので級長は忽ち免職となった。二年になって、又一寸勉強したら成績が上って、又級長になった。これは実に馬鹿馬鹿しく、果ないことだと子供心に強く思っ、結果を目指して努力することは、その後は勿論今日に至る迄やる気がなくなつて仕舞つた。そんな訳で学校の勉強の方は一切止めにして、専らスポーツに熱中した。殊に夏休みに三週間、伊豆の静浦で合宿する水泳部が一番楽しい思出であつた。

中学在学中は勿論、卒業して商大へ入つてからも水泳部の師範として毎年出掛けたものである。当時の先輩や仲間には后年名を挙げた人々が幾人かいる。トリコマイシンの発見者、細谷省吾博士は先輩の一人、水泳の松沢一鶴、陸上競技の浅野均一、画描きの高野三三男、英語学の中島文雄は仲間であつた。四、五年頃には水泳の他に陸上の短距離をやつた。この方はなかなか素質があつて、当時百ヤードの日本記録が十秒五分の三であつたのに、私は十一秒フラットで走つたのを記録保持者の東口真平氏が自分でストップウォチで計つて呉れて驚いた位の實力があつた。したがつて一高の先輩達から陸上競技部へ来いと誘れたが、前述のように、自分は商人になるつもりでいたので高商を受験した訳である。しかも平常スポーツばかりやつていて、入試に通り相もないので、五年の三学期文はクソ勉強をしてやつと人並に追付くことが出来た。

こんな調子だから中学時代の読書といつたら、文学好の友人の影響で、夏目さん、志賀、芥川、等を読んだくらいのものであらう。志賀が一番好きであつた。殊に「清兵衛のひょうたん」と「真鶴にて」というのが忘れ難い印象を残した。芥川のものでは「秋」以外は好きになれなかつた。学術書らしいものは自然学にせよ、人文にせよでんで見たことがないのだから、后年学問をする傾向性は殆ど無かつたといつてよい。ところで高商の入試は折角のクソ勉強にも拘らず、入試当日の朝、急に高熱を發して受験出来ず、一年の浪人生活をよぎなくされた。

富大経済論集

まともに受けていても入学出来たかどうかは怪しいものであった。一年の浪人生活の間に英語の実力は少しついたが、それよりも玉突きに熱中した。二年目の入試は、数学八題の中四題迄出来なかつたが、それでも何とか入学出来た。入学しても相変わらず学校のことは勉強せず、専ら水泳、芝居、女義太夫に凝っていた。芝居の方は中学の後年からよく見にいったが、この方は私の家が下町であつたので子供の頃から家の者とも二月に一回位は必ず行つてゐた。自分丈で行くようになってからはよく立見に行つた。十五代目羽左衛門、梅幸、が全盛で、六代目菊五郎、吉右衛門はまだ若手というところであつた。猿之助や寿海等は馳け出しにしか過ぎなかつた。芝居を見る丈でなく、役者の声色を使うことにも凝つて仲間と一緒に大分腕を上げ、素人としては相当なものになつたので、色街へ流しに行こうかと相談したが、流石にこれは実行しなかつた。

高商の本科二年迄進んだ時大学昇格となり、大学に進む者は予科三年に編入されることになつた。紙間屋の主人になるつもりであつた私は大学迄行く必要もなかつたのだが、何とはなしに予科三年になつた。この時始めて紀平正美氏からヘーゲル張りの哲学概論を聞いて面白いと思ひこれ丈は欠かさず出席した。といつて学校の勉強をする気には相変らずなれなかつたものの、一寸したキッカケから今迄のダラダラ遊びの生活から足を洗う氣になつた。余り自分が何も知らないのを多少氣恥しく感じたからでもあらうし、遊ぶことにも飽きが来たからでもあらう。急に色々な本を読み出した。社会問題、経済学、思想関係の本を分らぬなりに乱読した。そのうちに哲学関係の本に一番興味を持つようになつたが、これとて本当に分つた訳ではなく、その上学校の方は相変らず不勉強なので、ピリから三番でやっと本科へ進むことが出来た。

以上学問とは余りにかけ離れた私の前半生を比較的長く書き綴つたが、これは、私が后年学問を業とするに到り、又それを今日に到つても悔いていないことの必然的な前提であつたと信ずるからである。

二

大学の本科に入ってからには福田徳三博士の講義を大変面白いと感じ、博士の著書を片端から読み当時絶版であった書物迄買い集めて殆ど全部読んだ。その御陰で最大難関とされていた博士の試験も、原論、政策、学説史の三つを一年の時全部受けて合格した。プロゼミは高垣寅次郎先生で、ジエボンスの講読であったと記憶する。先生は当時アメリカの社会心理学者、ロッスやエルウッドに興味を持って居られたが、これに対して、生嚼りの哲学論を吹きかけて先生を悩ましたことは今思出しても冷汗ものである。二年になって愈々ゼミを極めることになったが、哲学に興味を持っていたが、本当に哲学が分っていた訳でもなく、且又左右田ゼミが高踏的で何か近ずき難いものを感じさせていたので、そこへ入る勇気がなかった。しかしさう感じさせたのには当時の助手の杉村広蔵氏が有名な皮肉屋であったことが原因であったかも知れない。ところが丁度その時学習院の教授であった天野貞祐先生が講師として哲学史を講ずるかたわら、左右田先生そのプロゼミを受持つて居られた。学校当局から示されたゼミ申込の書類の中に、誤って、天野先生もプロゼミでなくゼミを持つ教官として挙げられていた。私はそれが学校当局のミスであることを承知の上で、天野先生のゼミに申し込んだ。学校当局は勿論当惑したが、手落だから致方ない。天野先生に相談したら、一人でも希望者があれば引受けてもよいとのことと、とうとう私は強引に天野ゼミを開設させてそれに入ってしまった。

后年の先生は免に角、当時の先生は実に立派な人格であった。私は元々予科では、第二外国語はフランス語であった。中学時代一年上の友人の波多野という宮内大臣の息子にカブレてフランス語を勉強して居り、他の学科は全部駄目であったが、フランス語は、後に外交官になって惜しくも夭折した早間というのと、一、二を争っていた。しか

## 富大経済論集

し本科に入って哲学に心ひかれるようになってからは、独乙語の必要を痛感して、講習会へ通つたり、独学したりして初步的な学力丈はつけていたが、いよいよ天野先生のゼミで、独乙語の哲学書を講読して貰うとなるとその程度の独乙語では覚めない。一年下の左右田先生のプロゼミで、天野先生がヴィンデルバントの近世哲学史を講読して居られたので、これを聴講さして貰ったが、その時秀才川村豊郎がこのクラスに居て、抜群の読書力を示して居た。頭は素晴らしくいいけれど、情操が貧寒で学友として私の肌には合わなかった。ゼミの方は一週に一回スピノーザのエチカ、と后にはヴィンデルバントのプレルディーエンを天野先生と一緒に読んだ。天野先生は独乙の哲学書を解説する力は勿論日本一流の人であつたから、この先生を一人で独占する思まれた立場に置かれた私は文字通り死物狂いで勉強した。当初は一日に十時間以上も独乙語の字引を引いてとうとう一冊引つぶして仕舞った。それでも半年経つたら、大体旧制高校の三年生位の独乙語の力がついたら先生から云われた。折角独乙語で哲学書がどうやら読めるようになったら、天野先生が外遊することになり、ゼミナールを左右田先生に引受けて頂くことになった。今度は皮肉屋の杉村氏も私が天野先生のところで哲学を一年間専攻したとことで、飛んだ勘違いをして私を買かぶって歓迎して呉れた。

左右田先生のゼミに入つて見たら、本多謙三という大物が居た。酒井正三郎、榊原巖が同級で一年先輩に南亮三郎、大北文次郎が居た。本多君はあれ丈の俊秀であり、左右田先生すら一目置いて居た位であり乍ら謙虚な人格であつたので忽ち私は同氏に引つけられて仕舞った。恋愛にも似た気持で同氏に近付きを求めたが、君も私を受入れて呉れ、君が亡くなる迄親しい交りを続け乍ら多くを教えられた。私が卒業后、兵役にとられて、渋谷の輜重兵隊に閉ぢ込まれていた時、ワザワザ御菓子を持って面会に来て呉れたことが何度あつたか知れない。実に友情にも厚い人であつた。私も彼れの神戸の家に泊つて隣合せて一つのカヤの中で寝ていた時略血されたことがあつたが、何かそんなことも私達の友情を強く結びつけて呉れたと思つた位であつた。

左右田ゼミに入って、免も角本格的に哲学を学んだという気がした。ゼミナールというものの指導が如何にあるべきかの典型を示して頂いたといってもよい。更に気づいたことは先生位の大秀才になると、普通の秀才は問題にせず却って多少鈍くともコツコツと真面目にやる学生の方を認めて下さるということであった。私の卒業論文は「新カント派の倫理観」という、ヴィンデルバントとジムメルとを読んで書いたもので、勿論取るに足らぬ駄作であった。それでも一、二ヶ所一寸面白いところもあると先生に云って頂いて卒業さして貰った。先生は本来卒業生の就職の世話をせぬことになっていたが、これもどうしたとか、先生の出身校のY校という横浜の商業学校に近く専門学校コースが出来るので、そこで「精神科学概論」を担当するというところで、不敢取Y校の教師として勤務することにして貰った。元々先生が頼んで無理に入れて貰った関係で、受持は地理と歴史であった。

全く専門外の課目ではあったが、当分のこととあきらめて、半年程勤めている中に徴兵検査に甲種で合格して、入営することになり、十二月で学校の方は休職となつて一年志願兵として輜重兵隊に入隊した。不愉快千万な兵役を終えてやっとY校に戻るつもりでいたら、その間に先輩の宮崎力蔵氏が小樽高商を止めて、行くところがない尽に私の代りにY校に入っていたので、私の入る可き席はなく、自然退職となり、当時先生が所長をやって居られた横浜社会問題研究所の研究員の一人にして貰った。私の外に山中篤太郎氏が研究所の実務をとっていた。榊原巖氏も研究員で居たが、福島高商に口があつて就任して行つた。研究所の仕事の一つとして、「新カント派の社会主義観」という論文集を出すことになった。予て、一週に一回、先生の門下生たち、杉村広蔵氏、前記の宮崎氏、本多謙三氏、榊原氏私等が集つて研究会のようなことをやっていた。その結果をまとめて刊行したものであった。この論集には、先生の協同体倫理に関する論文を始め、杉村、本多氏等の勝れた論文が含まれていた。その中に私は「クロージュの社会主義観」というのを書いたが、これも頗る駄作で、この論文集を当時から右翼思想家として有名であった蓑田胸喜氏が

富大経済論集

批評をした際、私の論文丈を褒めたということで、却って物笑ひとなって閉口したのが落であった。

その間に私の中学時代の旧師で一高の西洋史の教授であった亀井高孝先生が、安倍能成氏と友人の間柄であるというところで、私を紹介して呉れた。ところが安倍さんは、その時京城大学の法文学部の教授であったが、同じ法文学部の同僚で民法の担当者であった藤田東三氏が、私の中学時代の一年先輩であり、私の方では先輩であることを覚えていた程度であったのに、先方では、中学時代に私に柔道を教えたことがあるとのこと、大変好意を持って下さり、安部さんとの藤田氏の御尽力で京城大学法文学部の助手として採用して貰うことになり大正十五年四月に京城に赴任した。私はそれ以前や、その後も、何時も実力を買かぶられたり、勘違いされたりして思わぬ人から手厚い御世話を受けた。我儘に育った世間知らずの故に、随分他人に迷惑をかけ、又憎まれたりする一方、又、特定の人に好意を持たれるという私の宿命は私の若い時から今日迄引続いている。

三

京城大学の助手時代は経済学講座の助手であるに拘らず、安倍、宮本、后には田辺重三氏等の哲学者について哲学の勉強を続けた。この三人の人々と週に一回、フッサルや后にはコヘンの輪読会をやった。一番若い助教授の田辺氏の学力が先輩たる安倍、宮本両氏を遙かに凌いでいたことを記憶している。田辺氏は人格も立派で色々教へを受けたが、私が接した学者の中で、左右田先生を除いて、到底及び難い距離を感じしめられたのは、本多謙三氏とこの田辺重三氏の二人である。

私は任期不定の助手として採用されたので別に助教授にして貰う期待はなかった。妻子を抱へて、朝鮮迄出掛けて行くのに将来について何の期待を持たないということは、今考えて見て自分が如何に世間知らずの迂活な人間であっ

たかを思わざるを得ない。しかし、一、二年する中に助手が次第に殖えて、任期が問題となり、私は助教授に昇任するか止めるか何れかということになった。前記の藤田氏の外に政治学の戸沢氏、憲法の清宮氏は私を助教授に推し、私の講座主任の四方、ローマ法の船田、法哲学の尾高氏等は、それに反対で、法律の助手をして居た森谷克己という人を経済の助教授に推した。私は経済の助手であるのに経済学の勉強をせず、森谷という人は法律の助手であるから、二人ともその資格に無理があった。ついに意見の分れた二つのグループの教授間に不和の空氣を生み出した。丁度その時京城高商の経済原論の担当の教授柴山という人が外遊することになり、その留守の間の講義を私にやれという事で招かれた。私は勉強していない経済学を講義する自信がないので当初は御断りしたが、助教授問題がもつれて尾朝氏等の私の書いたものに対する評価は低く、到底助教授になる見込はないので、私の方から身を引いて高商に移ることにした。私は尾高という人は始めて会った時から虫が好かないごうまん人だと思っていたが、先方でも私を生意気な人間として氣に喰わなかったらしい。勿論私の書いた論文がよいとは更々思わないが、尾高風情にけなされたことが口惜しかった。その上彼は私の恩人藤田氏が運動不自由な病氣になった時、強要して京城大学を退職せしめた主動者であつたので、后年東大へ来て、世間的な名声を博したが彼れがペニシリンのショックで死ぬ迄、私はいよいよ感情を持つことが出来なかった。

京城高商に移って二年間、留守の教授の穴埋めに、経済原論と商業史とを担当した。大学一年の時福田博士の試験を受けた時以来久し振の経済学の勉強であつた。講義文は独乙の適当なハンドブックがあつて、これを頼りにやればするが、自分が経済学に不案内では講義をしていても不安で仕方がないので、日本語の実証的な経済学の書物を沢山買い込んで、分らぬ乍らも一生懸命に読んだ。マルクス等もこの時に割合読んだという記憶がある。原論の講義はシユムペーターのドグメンゲシヒテ、アモン、ディール、ウィルブラント、シュパン等を参考としてやった。京城大学



富大経済論集

を止める前に二つの論文「精神科学における価値と個性」並に「主観価値と限界効用説」を書いた。この中前者は尾高朝雄にけなされたものであり、后者も経済学関係の人が読んで評価して呉れなかった。しかしこの方は、後に「商学研究」に発表して、一部の人からは評価された。

経済関係の講義は原論担当者柴山教授の帰朝と共に止め、その後は修身、哲学、独乙語、西洋史を担当して、再び経済学から遠ざかって仕舞った。尙京城高商の同僚は本格的な研究意欲に乏しく、学問的放談を好む傾向があり、私もそれに巻き込まれて、京城大学時代のような勉強が出来なくなった。その揚句に、学内の帝大と商大との閥の争ひの飛ばちりを受けて朝鮮の北境にある会寧と云う田舎町にある全鮮一の貧弱な商業学校長に突如として左遷されて仕舞った。此処での五年間は校長という職責の故に、高商時代とは別の意味で本格的な研究を妨げられた。その代り教育者としての実践を通じて、書齋では到底学び得ない多くのことを教えられた。と同時に今迄のような独乙流の抽象的な学問の無意味を痛感し、英米流の経験論的思考法の重要性をハッキリ悟らされた。読む本も哲学から、教育学、心理学の方に転じた。その後暫く心酔したデューウィを読み始めたのもこの時であった。会寧在職中の末期に、咸鏡北道の学務課から依頼されて、「鍛錬」という論文を書いた。これは当時反動教育の一環として鍛錬教育が強く叫ばれていた時であったので、別にそれに便乗したわけでもないが、「鍛錬」という型の教育が、所謂説得による教育と異なる実践を媒介とする教育であることを、日本文化の伝統を背景として解明して見た。

とに角五年間に渡る私の教育実践者としての体験とその間の読書との総決算であって、自分としては相当の自信を持っていたけれど、朝鮮の片田舎のこととて、誰れも評価して呉れはしなかった。会寧に五年も居ついて、社会的に栄達する期待は持っていなかったが、六年目に新義州の商業学校長に転じた。会寧在職中道庁の学務課に佐藤という視学が居って私と話が合い親しくなった。ところがこの人が偶々私の商大時代の同窓安彦孝次郎と従兄弟の間柄であ

った。しかも、安彦氏がその時、私が大学を出た時に一応就任の目標であった横浜市立商業専門学校の教授であったので、安彦氏に佐藤氏との間柄を報じたついでに機会があったら同校へ私を呼んで欲しい旨を伝へたことがあった。安彦氏は私を覚えていて呉れて、私が、新義州に移ってから、横浜の学校の修身の教授が止めた后任として、私を校長に推せんして呉れた。何か書いたものを見せよとのことで前記の「鍛鍊」を送ったところが、これが安彦氏にも校長とも馬鹿に氣に入って、私を採用して呉れることになり、新義州は一年余りで、十余年の朝鮮生活を捨て、且つ六年間の校長生活にも別れを告げて、再度横浜に舞ひ戻ったのが昭和十六年六月であった。

#### 四

市立横浜商業専門、俗称Y専では、担当は修身で兼学生課長であった。同僚に塩野谷、田島、山城等の勝れた少壮経済学者が居た。此処では年四回関機雑誌を出していたので、それに掲載するために、在職三年間に五つ六つ論文を書いた。主として倫理学的なものであったが、その中の「実践としての武士道」という論文を旧師で当時京大の倫理学の教授として、又「道理の感覚」の著者として、名声噴々であった天野貞祐先生に送ったところ意外に高く評価され、それがキッカケとなって、天野先生が校長となった甲南高校へ転ずることになった。私は自分が商大出である拘らず商大という肌合が好きでなかった。それで京城大学等へも行ったのであるが、今度も又、商大的色合のY専を去って恐らく全国唯一人の商大出身者の高等学校教授となった次第であった。

ところが甲南高校に来て見ると、世間からは日本最大の人格者として認められ、私自身も若い時から尊敬していた先生のところで本当に教育者らしい仕事が出来ると勇んでやって来たのに、天野先生の評判の悪いことは話の外であった。次々に文集に收められて洛陽の紙価を高めていた名講演も、教官始め生徒も誰れも外方を向い聞いてはいな

富大経済論集

い。一体これはどうしたことであるか。天野先生は、その時或る人物の掌中に全く操られていて、その人間のかいらいであった。先生自身は甲南高校を理想的に建て直すつもりで居乍ら、日々にこれを悪化させていた。現実を知らない観念的な人格者が現実飛び込んだ時の惨めさというものの実例であった。私は天野先生に反対する人々に説いて先生自身が積極的に間違った行爲に出ているのでなく、その背後の人間が悪いのであることを或る程度納得させたがそれは同時にその人物から私は極度に敵視される結果を招いた。彼れは先生に私のことを全面的に中傷したが、又それを先生は全部受入れた。こうして私は長年に渉って崇拜して来た恩師に裏切られて、弊履の如く捨て去られた。先生の反対派の人々は呆然としてそれを眺めていた。反対派の人々がもつとも手強い奴と見て居た私を、先生が自ら却けて仕舞ったからである。

失職と戦災という重ね重ねの傷手を受けてよくぞ生き延びたと思うが、二十一年の四月に旧友の援助で福井の師範学校に拾い上げられた。一、二年の后には男子部長となり、学制改革によって福井大学部教授として社会学を担当することになった。

五

此処で私は始めて社会学を本格的に自分の研究の対象として取り上げることになった。社会学は我国では帝大では文学部の哲学科の一課目であったが、専門学校では一部の高商で撰択科目にやっているに過ぎなかった。学制改革に伴ってアメリカ式の学課配置から学芸学部、専門科目として、又一般教育の社会学の一課目として正式に認められた。私はそれ迄、経済学、哲学、教育学、心理学と、学問的放浪を続けて来た未だに、社会学においてやっと自分のやる学問にたどりついたという自覚を持った。

以前から社会学に関する書物は相当の分量に持つて居り又読みもして来たが、それを自分の専門の研究とする心構えを欠いていた。此処に到つて、今迄自分のやって来た学問的放浪が、社会学をやる為の準備でこそあれ決して無駄ではなかったことに気付いた。社会学の講義をするために、勿論社会学プロパーの本を大分読みはしたが、社会学の知識を豊富にすることが社会学の研究であると思うには、余りに私の精神は成長していた。社会学の研究の対象は、社会学の書物の中にあるのではなく、吾々生きている社会的現実の中に存するということを私は何時の間にか体得していた。この考へはデュローイの書物を熟読することによって更に強められた。

私はこれ迄自分の性質に向かない校長、学生課長、師範の男子部長という実務をやらされる回り合せとなり、アカデミックな研究をする時間を大いに妨げられはしたが、社会的現実としての教育実践の経験を豊富に持つことが出来た。そこで私の社会学の研究は、この教育実践という社会的現実をその対象とすることであつて、それは当然教育社会学とならざるを得なかった。

当時アメリカ教育の影響で教育社会学ということがやかましく論ぜられていたが、それは、教育学の一分野としての教育社会学でしかなかった。私は、教育そのものが社会的事実として、社会学的にしか学問的に処理出来ないものであるという意味での社会科学としての教育学を考えていた。（この考えは後に富山大学に移つてから、学校の雑誌に発表した）更に社会学が従来取り扱つて来た巨視的な社会環境の外、教育実践においてはパーソナルな社会環境を分析する社会心理学的方法が必要であるということを考えていた。しかし当時は尙、今日のように社会心理学が日本では問題にされていなかった時代であつた。

福井に五年間居て、二十六年に富山の文理学部を経済科に移つてからは、同僚も学生も教育関係でなくなり、私の関心は、自ら教育社会学から社会思想史の面に転じて行つた。社会思想史に関心を持つことは当然マルクス主義への

関心を強めることになった。

## 六

マルクス主義は、殊に日本やソヴィエトの文献の示す灰汁の強さは、どうも東京育ちの私の肌に合わないものがあった。左右田先生以来の観念論哲学が唯物論を受入れることを妨げていたのかも知れない。しかし私は大分以前から観念論を捨て経験論哲学の立場には立っていた。しかし唯物論、とくに素朴の形の唯物論は、一度観念論の精緻な認識論をくぐったものには受入れ難いものであった。しかもその唯物論は免も角マルクスのものを読むと、他の経済学者、社会学者のものより筋が通っていて理解し易い事だけは否定出来ない。自分はマルクス主義を奉ずる程マルクス主義に通じてはいないが、自分の理解し得た限りのマルクスは素晴らしいというのが私のいつわらざる気持であった。巨視的社会環境を対象とするマルクス主義と、微視的社会環境を対象とする社会心理学とがどう結びつくかということが私の当面の問題となって来た。

これより先大熊信行博士が教授として来任され次いで学部長となった。私は博士の名を知るのみでその著書も殆んど読んだことがなかった。同僚となつてからも、学問の話はせず、趣味上の例へば犬だとか小鳥とか、食物とかの話をしていた。先生は私が左右田門下であるところからカント流の哲学信奉者と思つて居られたらしいのに、私が社会心理学をやっているということから興味を抱き、私に経済哲学の講義をすることを強く勧められた。今度も又、私は先生に実力を買かぶられるというはめに陥つた。前述の如くマルクス主義の研究の必要に迫られて、マルクス主義の経済学的文献は多少読んでいたが、一般の経済学からは久しく遠ざかつて居り、又哲学にもデュワイやマルクスを除いては興味を失っていた。こうした立場から経済学をやるとすればどんな経済哲学になるかということとは自分でも当

初は見当がつかなかった。しかしこれも大熊先生に勧められて「理想」に書いた「マルクス主義とパーソナリティの問題」という論文に次いで、その経済哲学特輯号に書いた。「左右田哲学の展望」は大熊先生には、左右田哲学への批判が甘いということでご不評であったが、私はこの論文のために左右田全集を読み直すことによって、今後の経済哲学の行く可き道に一つの光明を見出した気がした。それは、左右田博士が哲学者とならない経済学者時代の考え方の中にマルクスの弁証法的思考の芽生えを見出したかに思われたからである。いい換えると、独創的な学者の思考には弁証法的思考が生きているということを見たからである。逆にマルクス主義の文獻の中に弁証法的思考が案外生きて働いていないということも分って来た。通念としてのマルクス主義に囚われないで弁証法的に経済哲学を考へる道もありそうに思われて来た。そう思ってマルクスの資本論の価値理論を読み返して見ると今迄マルクス主義者の解説ではどうしても理解出来なかったところが案外スラスラと分って来るような気がした。

こうしたマルクス主義の理解をすすめるためにヘーゲルの弁証法の理解の必要を痛感してこの方も勉強を続けることにした。これと並行してヴェブレンの経済理論の勉強にとりかかった。今迄にヴェブレンの社会学に関するものは一、二読んでいたが経済理論に関するものは読んでなかった。予てヴェブレンはまとめて読んで見たいと思ひ、この二三年の間に彼の著書を出来る丈買い集めていたが、「技術者の本能」以外の著書を手に入れたのでマルクス主義以外の経済書を読む一つの方法としてヴェブレンにとりついて見た。半年程かかって、持っている本と、ヴェブレンに関するモノグラフィを二三読んだ。ヴェブレンはマルクス以外の経済書で私にもっとも理解し易く、且つ筋が通っていた。「技術者の革命」という表題でヴェブレンの読后感のようなものを大学の論集に書いた。その後、前に入手出来なかった「技術者の本能」も入手し、ドーフマンのヴェブレン等も読んで、多少解釈の相違も生じて来たので、機会を見てヴェブレンの総合的研究を書いて見たいという期待を持つに到った。前の左右田学説の一部と、ヴェブレンと

富大経済論集

は経済哲学を、マルクス主義その儘の適用としてでなく展開する可能性の見透しを与へて呉れたかに思う。

「孤立経済の方法的意義」、はこのような意図の下に、始めて経済学的論文として発表したものであった。ところが、偶々この論文の冒頭で、本論を引立す手引として、大熊博士の「マルクスのロビンソン物語」をとり上げたところ私の理解が誤っているということで大熊博士からこの論文に対して酷評を受けた。博士は「マルクスのロビンソン物語」で経済生活の社会的背景を重視するマルクスが、ロビンソン物語を引合に出したのは一見不可解の如くして然らず、即ち価値論は配分原理を欠き得ず、配分原理を説明するにはロビンソン物語を引合ひ出すのが妥当であるからというのが、右論文の主旨であるのを、私は、博士が、マルクスがロビンソン物語を引合に出す点についてその矛盾を追及したという表現を用いたのであるから、たしかに博士の論旨をとり違へているので、これに関する限り博士の私への批判は正しい。しかし私の本論が左右田学説の蒸し返しに過ぎないとする批判では私は服することが出来ない。それは左右田学説を全面的に否定してはいないが、その弁証法的唯物論の立場による解釈が存することが博士には少しも理解されていないからである。

博士は、近代経済学とマルクス経済理論の総合を予てから企図されているが、何時もマルクスを弁証法的唯物論を抜きにして理解して居られる。私はマルクスの経済理論の個々の点は措いてその弁証法的唯物論無しにはマルクス主義はないという理解を持っている。このようなマルクス主義に対する理解の相違が、私の前記の論文の論点を博士が理解しない理由であろうかと考へている。

最後に富山大学を去るに先立って、私は二つの論文、「経済理論における哲学と科学」並に「社会科学における意識と存在」を書いた。この二つの論文で、史的唯物論における物質とか存在とかいわれるものが、何故に経済的なものと結びつか、又それが何故に社会の下部構造であるのかということを反省して見た。自分では弁証法的唯物論の

立場に立っているつもりであるが、正統マルクス主義者に受入れられるか否かは疑わしい。マルクス主義哲学者としては日本でもっとも勝れていると思われる梯氏にしたところがそのマルクス主義の理解は到底正統派の受入れ難いものを含んでいるのであるから、私等の解釈が、受入れられなくともそれは当然である。

このようにして、最近に到ってやっとまがりなりにも経済哲学に関する論文が少しずつ書けるようになったことは大熊博士の激励の結果であると深く感謝している次第である。しかし、これからの経済哲学のまとまったヴィジョンがつかめたという訳ではない。一方に近代経済学、他方にマルクス主義経済学が対立している丈でなく、その何れともつかない旧式の経済学も生き延びているのが現状である。しかも近代経済学がその科学的技術性はよいよ高めて行くに従って、その手から漏れていく経済の問題も益々殖えて行くのではないかと思う。このような問題を今ではマルクス主義や旧式の経済学が拾い上げているかたちであると思う。しかし、これ等は本来経済社会学がとり上げる可き問題ではないかと私は考えている。経済社会学自体が未だハッキリしたテーマを持っているとはいえないが、経済哲学がその観念性を払拭することによってに経済社会学となるならば、今近代経済学の手から漏れて行く問題を十分に取り扱い得るのではないかと私は今考えている。したがって私の考へている経済哲学は経済社会学としてのそれであるといつてよい。